



志保之里

一

508  
16





門 4 曾 5  
番 508  
卷 164-66



熱田正覺寺畧縁記

尾張國愛知郡子官尾庄熱田今路龜足山正覺講寺八百  
 三代 後花園院沙字永亨年中融傳永乘上人開基に志  
 勅願の靈場淨土西山孤檀林の隨一なり柳上人當國  
 部田祐福寺才田葉れまゝに徳り兼備ありまひ物に  
 神明和光の利生弘まひ嘗て越の白山(冬詣)乃際  
 権現より弥陀三聖に孫儀を感得し給ひる其後今  
 祐福寺に有又尚所 熱田大神宮を之ぞ敬みて時々参詣  
 焉於一旦冬詣のつるさ東後所 鈴の御前乃祠邊に



行て鳴海海蒼海の嶮くきるに臨て神徳の深慮なる  
て心志像如ひしにあられ神人忽然としてまうた  
に甲らる我の當宮に神職粟田真人城をまと申す  
てゆり上人毎にあらまうて誦經念佛法樂とな  
り給ふし殊務の思ひ行もばあらの地と上人の寄附  
も願ふ寺と建立し無法度生し給て給て  
行路をぬり上人奇異の思ひ行りて誠は此地は一夜とあ  
し給止の心定めむとて落座れ中に坐具と敷物  
心定し念佛し給ひ翌日被真人の宅に居て對面

給ふ此方の親友おゆり上人あやうき其勢と給  
り給ひらまは真人申す是神靈の所作なりん  
其地を承り承るゆりぬ地を乞請まゆ給んと上人  
を付ひ行地主に寄り給り地を譲り明神の  
お現なりんと信服し便地と上人の寄りまゆ給  
上人收て善く法なり告給ふ遠近馳名と土不と  
運ひ資財を拙て佛殿僧舎石目に給受す上人  
公殿の西乃方に井と堀を給り靈龜の足あら給  
て上人奇り給りらる此は元四靈此一長壽寺なり



徳あり給ふ所ハ蓬萊嶋の東あり六宮に正法久任の  
瑞物なりとして便龜足山と号し給ひ也此、神意と  
得て草創の事過よ天龍小達一別、勅願の倫旨と  
賜ひ又金泥とて弥陀の三尊以圖書し永く尚  
るに物させ給ふ又永禄年中正親町院嘗て先皇れ  
睿意と案よせ給ひ重て勅願の給旨と有七世  
の位大融仙心上人賜ひ一日以後そ長六年以春  
改家あり竹輪にひつて殿堂としく之、  
けりぬらむとて宸筆に給像及淨土曼荼羅佛  
のたて今にこそを給む

一當寺 本尊ハ寛永年中廿五世在通教諫上人  
乃時迦村山崎の郷よ青山を即尼妻吉久といふを弟回  
松中城主仇久間大膳亮平勝之景し所の弥陀の  
立像と傳持せり然よ寛永十二年七月十五日夜其  
像夢中に告給り熱田の居民濟度乃時おれに連に  
正覺寺へ遷し安んじとそ久遠を給ふ上宗  
殿しこれ上人感歎よ傳するに所傳として被







請也一事は少くもさうう 嗚呼彼字造りてさうこれれと  
是痴邪執りやしあり道徳乃在俗乃男女とていふは  
行て多しハ噴きさすく思ふゆりて夜さうり今年  
東都邪術乃運徒ありて 救ふ繋れ字所 秘傳の竹堂  
ありて 詰問よりさうえ

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

○資暇録 風爐子とて 周繞とて 風と通どゆとて也

一説は形像 焔子と名け 理亦通 一とて 墨都荒ひさ茶の湯

墨都荒ひさ茶の湯

我 回風焔 毎 月ひく湯と煮茶と 煎と名義 知者

りれや

○或は 身体乃のゆき 甘き文字 知は者 師り 師り 師り

と 子具字 何ぞや 平曰 彙編 海録 宗王達 人 之 許心 机石

不 痺 人 之 足 心 孤 之 則 痺 者 何 也 蓋 人 并 心 通 心 氣

心 属 火 喜 動 故 不 痺 人 足 心 通 腎 氣 腎 属 水 喜







と着して全身と漳蔽す永徽の後ハ皆帷幄と用少  
頸や淺露せし後世ハ繪帛と以て制し身と蔽す  
のく成りしころ我國婦人身と蔽ふ被衣と一般に  
やれどるゆ

但し其の令く可びけりて別の制を是上古質  
素乃時婦人出行ハ輿車を以てし其被  
所の布帷とて頭を覆ふ身と蔽ひこれハ  
あれは星邪の故事と云ふ及ぞ彼にても何んか  
るしと云ふ記しを仔細に識者これを考ふ

○南唐近事ハ奇怪なり其の事ありて冠切あり

瓦礫と擲江都の大廳云云我國も亦

○元元天室遺事ハ長安の士女春野に遊びあはるる者  
苑に遇ふと席と設け草と藉き紅裾と以て遮り相  
挿掛して宴となす且其者逸つたりと云

我國京師東都壽日苑の客著逸これより  
近き世小袖幕を以てし婦人綉衣と掛しと  
少のくごころに初別吉野山の桜花同慶の際京  
新故く遠遊の身他國ありたり也

則夫の朝政甚幸にありし時めくは成小兒市  
所ハ香味とて擇ばし帷幄大なるものと  
我國と但俗ハ  
血の入りりと收ふ



○西使記ハ元の劉郁リウイクガ所記也ト云元主西征の才と云  
々ト 旭烈キョリツ 其コノ 中佛國乞石迷キシミの俗と云 釈迦シヤカ氏の衣  
鉢ハツと傳ツ者ノハ其人儀狀甚古タチイニシなり世所セカク繪エの  
磨マ像ゾウの如ニ 葷酒クニシと不ク茹ハ日ニヒ 稗フキコフ一合と嗜シ所ト記キ  
皆佛キヤク法ホフ禪ゼン定テイす等ト云々 竺チク六ロク佛フツ跡シヨク多タれバ且カ餘ヨ音オン  
流風リウフウの残ノ也ト云々 是レと漢カンノ使シ方ホウ略リョクと撰セン  
再傳サイデンして日本ニッポンに到キリ又倭ワケ制シと云々 是レと祝イハヒ祭マツリ遠トウ  
く法ホフ真マコトト述ノるト云々 其レ正マコト宗ソウと述ノ  
て述ノと行ユクずルハ山ヤマ三サン國クニの異イヘあリんや也 我ガ亦モ戒ケイ律リツ  
あリ僧ソウ乃ハ外ガイハ丈チヤウハ白ハク俗ソクト俗ソクト云々 其レ心シン且カ行ユクト  
云々 俗ソク家カト云々 其レ律リツ非ヒ為ニ俗ソク家カト

ガハ者ノ三サン年ネンハ口クハよクの悟ブツ通ツウ得トク法ホフと吐ハキて心シン行ユク  
背セをムと慚ソム愧カハセリ云々  
○宋ソウの范ファン成テイ大ダイガ桂ケイ海カイ蠻マン志シ云々 其レ中チュウハ  
曰イハレ延エン虫チュウハ海上カイウ水スイ窟クツの蠻マン也 舟フネ楫カキと以テ家ウチト云々 海物カイモノと採ト  
て生ナマと為ナす筈ハシト云々 水スイト没ボツす繩ヒツと以テ且カ腰ウサト繫ヒひク  
入イり得ユるトあリト云々 繩ヒツと動ユすト云々 其レ行ユクてハト云々  
又マタ其レ者ノ極キョクト熱アツクト云々 先マタ水スイト云々 急イサト是レと  
覆フクト云々 然シカドモらハト云々 寒サムイ標ヒラト云々 死シト或シハ大魚ダイイサ蛟カウ電デン備ヒの海カイ  
怪イナシト云々 解トク折セツト云々 死シト云々 其レ行ユクてハト云々 是レ  
我國ウラシマ海カイ邊ヘのあリト云々 其レ行ユクてハト云々 是レ  
あリト云々 其レ行ユクてハト云々 是レ







○或りぬあふぬしげむ法師の鉢瓦あつて我榮麻立  
了鉢し目食りくろくしどきと跟うたけびぬ  
我したぬぬを彼よりまうりうくおぬも物なり  
けく放とごが心よまうりうくおぬも物なり  
のあきけして座假の念もたうりうくおぬも物なり  
所とごまうりうくおぬも物なり

○此秋 法皇浄土の江つさうりうくおぬも物なり  
一念弥陀佛即滅無量罪とふぬ  
一丁にあつてひまふのふらぬとらぬも物なり  
そわくもや出智恵心身とふぬと

えんくまのぐえりし思花の却に折はくはくゆゆり物か枝  
きはとれまじが智と街ひゆらゆらゆらゆらゆら  
なするもくんととらうりうくおぬも物なり  
老の智者のうらまひもらうりうくおぬも物なり  
ゆらゆらん 御前の御智をうらまひもらうりうくおぬも物なり  
まうりうくおぬも物なり  
○正親町一位家 近衛前攝政 大政大臣 の家  
まうりうくおぬも物なり  
の子とがうらまひもらうりうくおぬも物なり  
て何れもがうらまひもらうりうくおぬも物なり  
まうりうくおぬも物なり















幻隠律師 予が秋と初し 終るるに

○九月ナハツキ十二夜 暮きつちやひく月ツキかきぬ

秋の暮の月ツキのすまじらぬ 風を招くはや 露の

くく題さぐりて

曉麻

月夜が 霧山の紅葉明く 夕をさうめつや麻の志

○真性院の上イダ長月ナガツキのすまじらぬ 山寺乃秋ヤマニシラいづるや

とゆくとぬき 山づきの秋はとて 山寺乃秋いづるや

こころをさぐる 心はさるるに

こころをさぐる 心はさるるに 秋の心

九月

つらあつて 秋の心はさるるに

秋の心はさるるに 秋の心はさるるに

秋の心はさるるに 秋の心はさるるに

秋の心はさるるに 秋の心はさるるに

秋の心はさるるに 秋の心はさるるに

秋の心はさるるに 秋の心はさるるに

秋の心はさるるに 秋の心はさるるに











ふぐりくはえく他のあまとうゆらあふくさくあましく  
いしく考とつてせし此年享保乙酉とてそく令あま  
佛のあまみとあましく三寶は祈り夏物とて経  
書物とてけとてけに彼男教とて書り回ふゆりゆ  
そ男とてけ日ハ三州ゆく経書物とてけとてけと  
此の志と感と父母ハ命の内はあひし半夏のてよま  
女ハ貞節のら志とてけとてけとてけとてけとてけ  
やとてけとてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
らとてけとてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
から貞女ハ回とてけとてけとてけとてけとてけ  
けとてけとてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
今世ハ丈夫の家より農高の末

やとてけとてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
者たて鼻のやとてけとてけとてけとてけとてけ  
考不義のやとてけとてけとてけとてけとてけ  
あましくあましくあましくあましくあましくあましく  
の利生とてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
けとてけとてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
あましくあましくあましくあましくあましくあましく  
節誠あましく三寶はいのんよとてけとてけとてけ  
是と信とてけとてけとてけとてけとてけとてけ  
。智鋒僧正退院の事  
捨世のやとてけとてけとてけとてけとてけとてけ











江南雪裏梅花信  
凡月掃來名利所塵  
世但并寒机淨何時去入白鷗園

○ 乙巳冬夜

信阿

梅先ラ南至ニ白晴軒ニ竹隔ラ西斜ニ暗頽ニ垣ニ候ニ晚

霽ニ長シ鐘ニ半夜ニ添ニ未シ華ニ髮ニ豆ト糜ト温ニ  
冬ニ至ス 飯添ニ歳

仲冬十有七冬至適遇弥陀降誕日仍唱一絶

仁勝ニ意ニ尊ニ降ニ談ニ辰ニ一陽今日復ニ人ニ主ニ輪ニ

天根轉ニ處ニ方界ニ將ニ作ニ并ニ量ニ壽ニ城ニ民ト

同日香偈

照破人天夢白毫  
晚色同寒紅花不尺并  
量香雲其臺

○ 信ハ設心實多

不疑ハ不差爽多

○ 水府常福の真阿上人三部經合讚七卷と述一今茲

七月板成て行ハ實ニ先ニ經ニ解ニ多ニ一ニしニるニ壽ニ經

觀小別々に述ニ三部ニ一ニ午ニの註ニかニりニしニるニの

以テ淨家鎮流義正意の註出來蓮社の至宝トし

づ一

○ 清板白骨觀の圖あり新ニにニ寫ニして掲ニぐ

位ニ山ニたニしニ林ニとニあニらニれニすニるニ身ニとニ何ニれニん

○ 心ニ也ニ月ニ法皇修學歌文にニ所ニ奉

乃ニ沙ニ具ニとニ惜ニもニりニしニるニ時

山皆お葉 用お字御製



秋存重来石洞中  
 名号西脚野村集  
 満山一様葉楓樹  
 富瑞子後継坊子  
 扱ふぬ子入の指  
 くるみゆけて  
 聖堂山以きて深  
 け  
 法家の石形もゆり  
 一そ中に  
 白雲の跡の  
 水外

○己十一月四日

法名

林宗理一御幸御遊

高

参音色

慶雲樂

萬歳樂

近富

近細

近任

高房

散子

近任

喜春樂

高房

高忠

近富

近細

史官樂

と富

近義

近任

高忠

陵王

高房

退小

長慶子

石方

参音色

慶雲樂

長保樂

東儀内近頭  
孫内守

兼陳

中心音

林京亮

東儀近持

廣経

兼村



貴徳

木肥前守

廣雄

東儀右衛門尉

多比良守

勇雄

白濱

廣経

久連

新隼鷲

忠音

勇雄

勇村

久連

納曾利

廣経

退古

長慶子

○ 武具と隠し物類の目録

凡乃如

一 瓦文綴具足 七十頰 一 卯死綴具足 八十頰

一 黒草綴具足 百頰 一 薄前綴具足 二百頰

一 六面頰

一 銀筋立甲 半四割 一 惣銀筋甲 百割 但し

一 刀銀指 二百半腰 一 長刀 八十振

一 鉄炮 二十二挺

武具の印荷物

一 味噌 七百斤 一 塩麴 早稲

一 海産 二百斤 一 雜貨 七百連

布印荷物 成り不換

一 十六端帆 一 帆柱 一 舟



一莖

六百枚

以印帆量之者一  
右字少短者九之名

北前四年之者一

日回甲山之者一人

海前四年之者二人

右一全元仕の者

海前四年之者二人

海前四年之者二人

右一全元仕の者

一高己二月十日海前四年之者對馬國(海)  
豊前沖之域に東風にあひ廿七八里推  
沖一船方丈以上と数日とれより海前四年之者

海前四年

九名

又九名

九名

海前四年

海前四年

海前四年

海前四年

海前四年

海前四年

海前四年

海前四年



内ノ穢氣と見え早蓮を彼一はと江ノ月  
三日を彼所より所々々々如く主たる穢  
を傍りたり一は道なきと傍り并を彼より  
少人如く穢氣を内路より者九人并全元  
はり者四人を捕長崎一系宰者より 傍り  
和南地を改め味方より前にも如くは後  
一は此後之夜目く波海より白如くは後  
者より者より國々々々所々々々陰謀より又捕列大  
坂にも是を重おし口経より陰謀よりと云々

己八月

い一紙の許にあり一は之に記一はり鳴呼利感ハ

りて中にも極く愚うる事かゞ海漢古今萬々に  
してこれに命と捨てて死なす類の如く一はり  
戦國の武人七將利欲のみか 或る云は後世の使りしんり長  
傍のぬけ前羽部人參の私販等一はり一はりに利と  
と云々君と云々人何はあそぞあそぞ立獨の利に  
金取喪一はりと沙す者也世多一 須目も我御堂の高  
と彼より者 亦穀あらんり一はりのの鬻取止の如く  
三の如くす 亦穀あらんり一はりのの鬻取止の如く  
さあれは又刀劔の所らんり一はりのの鬻取止の如く  
のまらんり 研取の者よりやいあらん一はりのの鬻取止の如く  
てう穢の行止す財宝のあらん中商人絶つる  
お身のはくらんり 傍りの鬻息さすか一我人



凡<sup>ゴ</sup>身のあはれん間<sup>マ</sup>いらが 妄<sup>マダ</sup>念<sup>ニ</sup>いゆるべき儒教も佛<sup>ブツ</sup>法<sup>ポフ</sup>も  
立<sup>タチ</sup>てきて學<sup>ガク</sup>びしうが惑<sup>マド</sup>といふ可<sup>カ</sup>うな悟<sup>ト</sup>めり人<sup>ヒト</sup>の美<sup>ミ</sup>の  
中<sup>ナカ</sup>しくもくもあやゆらと羽<sup>ハネ</sup>とを美<sup>ミ</sup>にむくも  
一<sup>ヒト</sup>國<sup>クニ</sup>の能<sup>ノ</sup>念<sup>ニ</sup>はぶたうてあづくも其<sup>ソノ</sup>れはも  
痛<sup>イタ</sup>苦<sup>ク</sup>松<sup>マツ</sup>香<sup>カウ</sup>しく 累<sup>ルイ</sup>の積<sup>セキ</sup>慮<sup>リョ</sup>財<sup>サイ</sup>の成<sup>ナ</sup>に走<sup>サウ</sup>便<sup>ベン</sup>せられ  
或<sup>アル</sup>は水<sup>スイ</sup>火<sup>カ</sup>盜<sup>トウ</sup>竊<sup>セツ</sup>死<sup>シ</sup>心<sup>シン</sup>家<sup>カ</sup>債<sup>サイ</sup>主<sup>シュ</sup>の乃<sup>ノ</sup>に焚<sup>ヒキ</sup>標<sup>ヒョウ</sup>劫<sup>キョウ</sup>奪<sup>ダツ</sup>路<sup>ロ</sup>られ  
くれも是<sup>コノ</sup>も愛<sup>アイ</sup>毒<sup>ドク</sup>川<sup>カハ</sup>々<sup>々</sup>しく 憤<sup>イキ</sup>と強<sup>キヤウ</sup>び御<sup>オ</sup>怒<sup>ナ</sup>と  
懐<sup>イダ</sup>き終<sup>ハシ</sup>に終<sup>ハシ</sup>身<sup>ミ</sup>天<sup>テン</sup>命<sup>メイ</sup> 一<sup>ヒト</sup>の目<sup>メ</sup>にうれ身<sup>ミ</sup>に使<sup>シ</sup>は  
るのそく、我<sup>ワレ</sup>も亦<sup>モ</sup>憂<sup>ウ</sup>懼<sup>ク</sup>可<sup>カ</sup>恐<sup>コウ</sup>れしく 勤<sup>キン</sup>若<sup>ニヤク</sup>しく  
くめぬ、衆<sup>モウ</sup>の寒<sup>サム</sup>操<sup>ソウ</sup>と結<sup>ムス</sup>で痛<sup>イタ</sup>響<sup>ヒビ</sup>にせに長<sup>ナガ</sup>年<sup>ネン</sup>空<sup>カラ</sup>  
と斬<sup>キル</sup>心<sup>シン</sup>の愧<sup>ハズカシ</sup>せらるるにや

○ 吾<sup>ガ</sup>のよりうくあきまをいあしうまはにぬ  
くはくあそ海<sup>ウミ</sup>の舟<sup>フネ</sup>うらにうらなれたる  
くあきまをいぬねのきあそげにうはる  
山<sup>ヤマ</sup>里<sup>リ</sup>のん地<sup>チ</sup>そあそぬのうそ書<sup>カキ</sup>るまはる  
のあきまをいぬねのきあそ又<sup>マタ</sup>摺<sup>ス</sup>のまはる  
そと海<sup>ウミ</sup>の舟<sup>フネ</sup>うらにうらなれたるにぬ  
のなれあをいぬねのきあそにぬ  
くはくあそ海<sup>ウミ</sup>の舟<sup>フネ</sup>うらにうらなれたるにぬ  
前のわの吾<sup>ガ</sup>のそとあきまをいぬねのきあそにぬ  
白<sup>シロ</sup>きまをいぬねのきあそにぬ  
くはくあそ海<sup>ウミ</sup>の舟<sup>フネ</sup>うらにうらなれたるにぬ



正月の初又波宿の歌しそ東の書戸とありけ  
をねば前ののりしりどりこり入りちがりしりなる  
光にいとはせやりにえりるるかざりしりいさる  
春の曙のいしすもあさしり宿もあざりしり  
けりまよりの筆になるさやの波をれはしり  
しり歌の言もあさるる

おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね  
しりつしりすも思ふあつりしり世にれぬぬ  
こがんとしりあやほしりしりしり母あれ

○ 正月十日の會 甲子日

おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね

○ 弓珠院の大師傳初夜乃憾はは糸一色明い

しりけに自根塵と拂ひけりしり地がすり安樂の道  
般舟助喜せしり法入禪定見十方佛の傳せるる  
おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね  
おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね  
おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね

おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね  
おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね  
おろけぬおのほひもお仲とひまほぬぬる香をね











Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. The script is dense and fills most of the page. There are some faint markings and a small circular stamp or mark near the top right of the text area.

Handwritten signature or name in a cursive script, possibly in Chinese or Japanese characters. The signature is written in a bold, expressive style. There is a small circular mark above the signature.

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or name. The text is written in a dark ink on aged, yellowed paper. There is a large, bold circular mark to the left of the signature.



